

小林 桂〔副会長〕

「児島湖 21 県民の会」

児島湖の惨状

1960年代末から湖内に浮草、ホテイアオイ、アオコなどが繁殖して手が付けられなくなり、同時にフナなどの大量死、頭や内臓が腐った生魚が多数発見される異常現象がつづきました。周辺の用水路では水が悪くなり、ナス、レタス、イチゴなどへの灌水に水道水が使われるようになりました。

70年代になると、水質悪化は稲作にもおよび、水の悪い地区ではコメの品質検査で下位の等級が多く出て問題になりました。

環境庁が発足して国による河川水質の調査がはじまるまでは、水質汚染対策は皆無でした。

水質保全計画

ところで、児島湖のような閉鎖水域の水質改善対策が始まるのは、湖沼水質保全特別措置法(湖沼法)が制定され、岡山県の児島湖流域も国の指定地域となり、ようやく対策がとられる運びになってからです。

小林 桂 氏

1931年瀬戸内市生まれ。岡山市中区在住。児島湖 21 県民の会副会長。(財)おかやま環境ネットワーク理事。

この対策を「水質保全計画」といい、県レベルで執行されている省庁別の施策を、湖沼法の趣旨にもとづき、府県ごとに1期5ヵ年の計画に取りまとめ、総合的に水質改善策を促進するというものです。

具体的には、下水道の普及、湖内や河川の浚渫、合併処理浄化槽の設置促進、水質改善に向けた市民意識の啓発、などの総合対策が施策の主要課題となり、県民・流域住民あげて取組もうという内容です。

ほのかな希望

水質全計画は2000年で第4期を終えて5期目の後半に入っています。現在、幸いにも1975～85年までの10年間の、環境基準値の2倍を超える状態から、およそ1.5倍程度に改善してきました。

しかし総合対策として挙げた～のうち、何が効果的であったのか、県の担当課は政策面の評価を未だに県民に示していません。これでは「児島湖は県民共通の財産、ひとり一人の努力が大切」と啓発したことと乖離し、岡山県は説明責任を果たしていません。

データ解析の成果

1996年頃、児島湖の水質はよくなっているのか、と訊ねる人がありました。

当時この質問に正しく答えられる人は、恐らく誰一人もいなかったと思います。

水質保全計画第4期の2005年前後でも「児島湖の水質は依然として厳しい」と言うのが県の公式見解でした。

しかし私どもは、「1997, 8年頃を境に改善局面に入った」と指摘してきましたが、それには約1年を超える集中した作業が必要でした。県が蓄積した30年間(12地点、毎月1回)におよぶ膨大な水質データを「箱ヒゲ図」の手法を使って解読した裏付けがあったからです。

湾岸域と汽水域

今後は、児島湾岸地域の環境史にも注目したいと思います。それは一般的な史実を追うだけでなく、山・川・海の変化と変貌がすべて関係する湾岸地域は、汽水域でもあり魚・鳥・植物も揃う場所です。いかに地域の環境が変貌してきたか、改めて知る必要があると考えます。

またこの地域の自然ほど、干拓により劇的に影響を受けたところはありません。時代を明治以降の100年余りにしぼり、細かく見て行くわけです。

特に1960年前後は、あらゆる面で変化が激しく、記録に残す価値があると思うからです(了)。